



HiFi追求リスニングルームの夢 No.556

## 「アナログ庵」でオーディオ研究と 一日8時間のレコード鑑賞

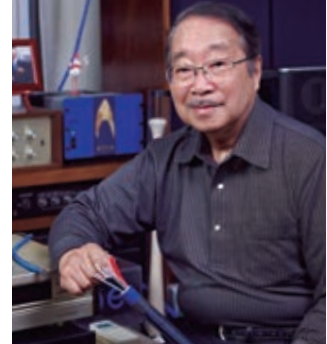
東京都中野区 前園俊彦氏宅 MAEZONO Toshihiko



2月に喉の手術を受け、しばらくはお会いできなかった前園俊彦氏から、全快のご連絡をちょうだいし、新しい研究所に遊びにいらっしやいとお誘いを受けた。手ぶらではお邪魔するわけにはいかないので、近況を記事にしましょうと提案したのが今回のリスニングルームのページだ。病み上がりで年齢を感じさせない豪快なオーディオ再生に驚かされた次第。

(MJ編集部)

## Listening Room



新体制となった前園サウンドラボを主宰する前園俊彦氏。古い4チャンネルLP再生も追及中

### オーディオケーブルに着手

前園俊彦氏といえば、サンスイで映画スターやスポーツ選手を起用した広告を担当し、その後勤務したオルトフォン ジャパンではMCカートリッジとオーディオケーブルのプロデュースを行ったことで知られる、オーディオ界の「名物男」である。

オーディオ以外にも料理、写真に造詣が深く、製品写真は自ら撮影し、来客にスパイスの利いた自慢のカレーをふるまうことでも有名だ。

オルトフォン ジャパンを辞したあと、もうケーブルのプロデュースは行わないと一度は決心したものの、真空管アンプで知られるトライオードから復活の希望を受け、2度断ったのち3度目に誘われて断りきれなくなり、前園サウンドラボを興してトライオードと業務提携し「ソノトーン」ケーブルの開発に着手した経緯がある。

前園氏のケーブルに対するポリシーは、一流の金属材料を使用して、自分のオーディオシステムでよい音が出ることを第一とし、そのためには導体量を増してエネルギー感を得ている。単純に導体量を増すだけでは高域再生に難が出るため、細い線と太い線に分割し、両端で接続する手法を採っている。また利潤追求ではなく、いいものをできるだけ低価格で提供したいとの思いもあり、海外製の超高額製品に比べてその設定は低めと言えよう。

「ソノトーン」のスピーカーケーブルには切り売り製品が用意されていて、オーディオファンに対して製品を買うだけではなく手間をかけることの重要性もアピールしている。

その後トライオードとの業務提携を解消して、今度は自らの手でケーブルを売り歩くこととなった前園氏は、幸いご子息が経営に参加し、量販店での取り扱いも再開し、ようやく軌道に乗りつつあるという。





メインのターンテーブルはトーレンスのPrestigeで、アームはSME3012。プリアンプはジャズの生々しさを求めてクラウンのIC150Aを主に使用している。ラック頂部には故長岡鉄男氏が所有していたテクニクスSP-10Mk3が置かれている

## アナログ庵を作る

このオーディオルームは前園氏が故長岡鉄男氏から譲り受けた膨大なレコードコレクションを収めるためと、自身のオーディオ研究のためのスペースで、「アナログ庵」と名付けている。マンションの一室なので音漏れには気を遣い、普段から近隣住民と仲良くするため、北村英治などの著名音楽家を招いたコンサートなどを企画している。

ここは都内でも比較的古い鉄筋コンクリート造りのマンション1階にあり、以前親戚が住んでいた部屋を譲り受け、6畳と8畳の間の壁を抜いて1室とし、DIYで改装することで広々とした空間

を手に入れている。壁や天井の珪藻土は一人で塗ったというから驚きだ。

左右壁は一面レコードの棚で、総数は2万枚を超えるという。また北村英治や王貞治の写真が多数あり、玄関に掲げられた「アナログ庵」の文字は、サンスイ時代から親交の厚かった王貞治に書いてもらったものだそうだ。

ここにはケーブルのテスト用に自宅とほぼ同等のオーディオシステムが組まれ、JBLユニットによるマルチアンプシステムを構築している。メインはJBL4350Aのダブルウーファー部分、375ドライバー+2395、075トゥイーターによる3ウェイシステムが基本で、これにパイオニアのリボントゥイ



左右壁面にはラックをしつらえ、膨大な量のレコードを収納している。カートリッジキーパーにはオルトフォン ジャパン在籍時に手掛けたSPUをはじめとする製品がズラリ並ぶ。

ーターとジャーマン・フィジックスの全指向性フルレンジを付加しているのが特徴だ。ジャーマン・フィジックスはローカットと高域レベル調整のための専用ネットワークを介して単独のパワーアンプを接続している。このユニットの出す音がシステム全体に影響しており、このレベルを絞るととたんに音楽が寂しくなるからおもしろい。

先の震災で左チャンネルのジャーマン・フィジックスが落下し、振動板にダメージを受けたが、今のところ簡単な補修で済ませているため、大音量時に若干歪みが出るようだ。

### ジャズの生々しい再生を目指す

前園氏の愛する音楽はやはりジャズが中心で、あたかも目の前で演奏しているかのようなリアリティをオーディオに求めている。取材時にはCDとLPをかなりの大音量で聴かせてくださったが、たっぷりとした低域とリアルな音像が魅力であった。

無骨な2395ホーンから不思議なほど朗々とした音が出てくる。駆動するパワーアンプのせいもあるが、プリアンプが効いているのではないか。以前はマークレビンソンのNo.26Lを使用していたそうだ





中高域ユニット群の配置。375ドライバーは2395ホーンの長さのため、トゥイーターよりかなり後ろに下がった位置にある。375の手前に見えるのがジャーマン・フィジックスの専用ネットワーク

JBLの4350Aは本来横置きだが、前園氏の自宅同様縦に置き、その上に中高域ユニット群を置いている。4350Aエンクロージャーに取り付けられたミッドバスと中高域ユニットは使用されていない。手前は小林貢氏に勧められて導入したモニターオーディオPL100、右はウエストレイクBBSM-10

が、クラウンに替えて求める音はこれだと確信したそう。

低域パワーアンプも以前はマークレビンソンだったが、やはりクラウンに替えてJBLシステムとジャズの魅力が増したという。

### オーディオシステムは発展途上

この部屋にはオーディオ機器が数多く置かれており、それはかつて手掛けた製品だったり、サンプル輸入したものもある。アンプ類が多いが、レコードプレーヤーの多さにも目を惹かれる。故長岡鉄男氏の遺品が数台あるほか、小林貢氏から譲り受けたガラード301が左スピーカーの上にある。右は古いベオグラムだ。中古オーディオショップ

で入荷したばかりの、メンテナンス前の商品を現状で手に入れることも多く、気になる製品を見つけたらすぐに買いたくなり、そのため財布にはいつもある程度の現金を入れているそう。メインで使用しているトーレンスPrestigeもそうやって手に入れたとのこと。

昭和10年生まれの前園氏は、いまだ物欲にまみれたオーディオマニアだ。けなして言っているのではなく、誉め言葉ととらえて欲しい。中古オーディオは1点ものだから、見逃したら二度と手に入らないことが多い。編集子も過去に結構悔しい思いをしてきた。だから前園氏の気持ちが痛いほどわかる。

前園氏はそうやってオーディオ機器を手に入れ、



左手前のCDプレーヤーとプリメインアンプはPL100駆動用。メインシステムを駆動するパワーアンプは、低域がクラウンDC300、中域がAMPZILLA2000、高域がマークレビンソンNo.23.5。チャンネルデバイダーは4ウェイ対応のソニーTAD-900。ジャーマン・フィジックス駆動にはアリオンス-200を使用。左の古いバットは長嶋茂雄の、右の新しいバットは王貞治のサイン入り

これまでと違う音楽表現を追求しているのだと思う。だからシステムは常に改良されて発展を遂げる途上なのだ。レコード盤から少しでも多くの情報を引き出したい、それはオーディオマニアの悲願であろう。取材時に、2本のウーファーを独立してパワーアンプで駆動する方法を提案したところ、またやることが増えたと嬉しそうな表情を浮かべた。とても喉の手術で入院していたとは思えないバイタリティーにあふれている。一日8時間以上この部屋でレコードを聴くことを心がけていると話す前園氏は編集子よりも30歳ほど年上だが、見習わなくてはと反省しきりだ。

現在励磁型のスピーカースystemを導入の予定とのことで、オーディオシステムがいつそう賑やかになることは間違いない。



「アナログ庵」は前園氏のプライベート空間ではなく、ゾノトーンのショールームとしても機能するため、予約制でケーブル試聴が可能。また近隣住民を招いてのコンサートも催されている